

調査漁具の紹介：腰巻籠

今回は、アサリの調査などで使用する腰巻籠（こしまきかご）を紹介します。この漁具（図1）は江戸時代から使われている古い漁具です。

形状は、12 cm程の楕状の歯が付いた網籠に 130 cm程の振り棒と呼ばれる取っ手が付いています。本体をベルトで腰につないで、振り棒を前後に揺すりながらゆっくりと後ろ向きに曳き、海底を掘り起して貝類を採捕します（図2）。昔の腰巻籠は振り棒が木製、籠が竹製でしたが、現在は図1のようにステンレス製で重量が約 10kg あり、これを扱うのはかなりの重労働です。

かつての東京湾には貝類が獲れる良好な浅場がたくさんあり、各地で腰巻籠が利用されていました。しかし、そのような浅場はほとんどが埋め立てられてしまいましたが、現在でも、羽田、多摩川や三枚洲でアサリやシジミ、ハマグリなどが漁獲されています（図3）。

腰巻籠は固く締まった海底をほぐし、底砂内に酸素を供給して良好な海底環境を維持する耕耘の効果があります。



図1 現在のステンレス製の腰巻籠



図2 腰巻籠による漁獲の様子



図3 腰巻籠で獲れたアサリやハマグリ